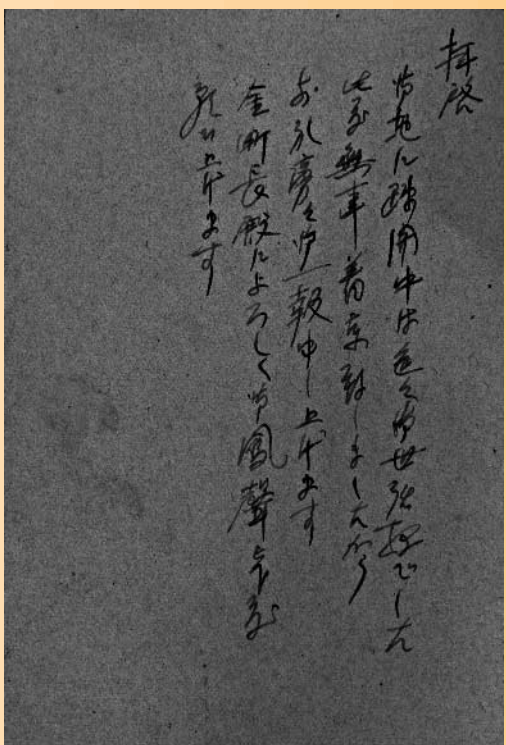
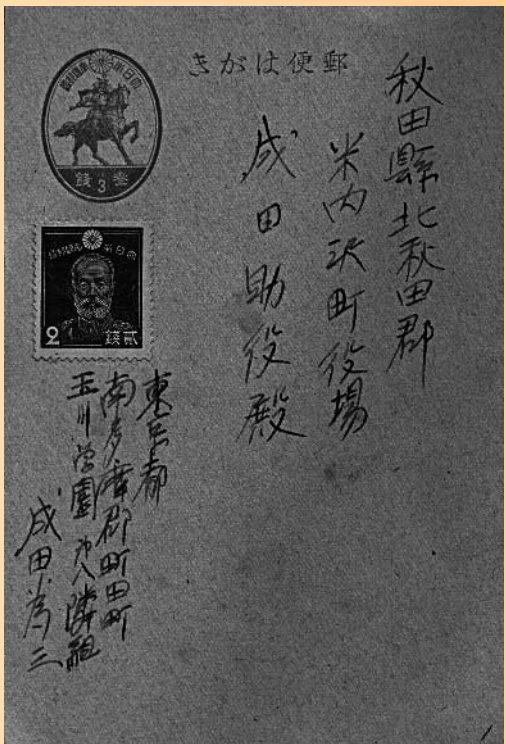




▲米内沢町役場成田助役へあてた葉書（表裏）

●旧漢字を新漢字に改めた本文

拝啓

御地に疎開中は色々御世話様でした此度無事着京致しましたからお礼少々御一報申し上げます金町長殿によりしく御鳳声頂度願ひ上げます

未投函の絶筆葉書寄贈

義妹・杉浦俊子さん偶然発見

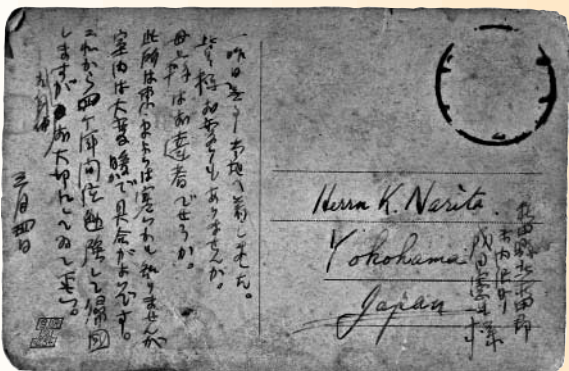
60年をがけ為三から届いた葉書



▲為三の絶筆葉書を岸部市長に手渡し杉浦俊子さん（左）

「浜辺の歌」をはじめとする歌曲や、本格的な器楽曲の作曲家である成田為三が51歳の生涯を終えた昭和20年10月29日、その日から60年が経過しました。亡くなる直前に為三自身が書いた未投函の葉書12枚が見つかり、為三の妻・文子さんの妹である杉浦俊子さん（千葉県松戸市在住）が10月20日、浜辺の歌音楽館を訪れ、岸部市長に寄贈しました。この中には、当時の米内沢町役場助役へあてた葉書も含まれ、60年をがけ為三自筆の葉書が新市へ届けられました。

昭和20年当時、為三は東京高等音楽学院（現・国立音楽大学）の教授として音楽活動に従事していました。が、同年4月13日、東京空襲により滝野川にあった自宅が焼失し、家財や作品の一切を失いました。その後、郷里・米内沢の実兄宅に疎開していましたが、多くの楽想を抱き、同年10月27日に再び上京し、玉川学園女子寮の一室に入居しました。それから2日後の29日に脳溢血のため急逝。子どもはなく、51歳10か月の生涯に幕を降ろしました。



▲浜辺の歌音楽館に所蔵されている為三自筆の兄：憲生へあてた絵ハガキ 大正10年3月4日付け、ドイツのベルリンから）時代の違いはあっても絶筆葉書と同じ筆跡

亡くなる直前に書かれ、未投函

寄贈されたはがきは、その27日か28日に書いたとみられ、当時の米内沢町役場成田助役や友人、知人、音楽関係者にあてたもので、疎開中に世話になったことへのお礼や転居のあいさつがしたためられています。12枚全部の葉書にはあて名が記されていますが、2枚には何も書かれていません。このことから体調を崩す直前とも考えられ、まさに絶筆と言えるのではないのでしょうか。

葉書は、平成12年に亡くなった文子さん（為三の妻）の遺品の中にあつたもので、杉浦さんが受けとったときは、手紙などがきちんと分類され整理する必要がなかったため、その存在を知りませんでした。しかし、手の骨折により外出できずにいた今年の5月に、ふと姉の遺品のことが気になって整理していたところ、為三自筆の葉書が見つかり、この日の寄贈となったものです。

文子さんに会っているように感じます。感謝にたえません」とお礼の言葉を述べました。

この後、平成14年に杉浦さんよりご寄附いただいた1千万円を基に、今年3月、映像音響設備をリニューアルした音楽館を見学されました。『浜辺の歌』は為三が東京音楽学校在学中の大正5年ごろの作曲といわれ、来年90年を迎えます。そして、今年60回忌にもあたり、新市誕生の年でもあります。為三から届いた60年振りの葉書には何のメッセージが込められているのでしょうか。音楽館では寄贈いただいた絶筆葉書を2階の遺品コーナーに展示し、公開しています。



▲疎開中に世話になったことへのお礼や転居のあいさつが書かれた絶筆葉書。12枚のうち2枚は、本文が書かれていない。



▲リニョールした館内で為三口ボットと対面する杉浦さん

何度もお会いしていますが、今日は、



▲60回忌の10月29日、為三の眠る龍淵寺で行われた追善演奏（雨天のため本堂で開催）